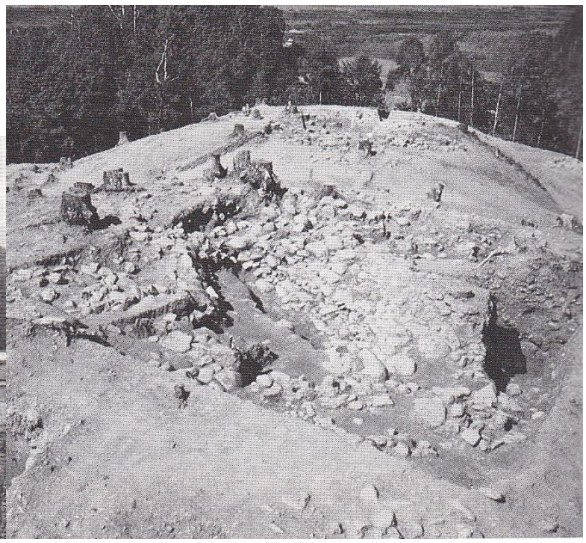
=市史編さん便り=　【34 号】 令和 3 年 9 月 21 日(火) 発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

幡多の卑弥呼　宅間一之著『土佐史つれづれ』より

本市史監修で市史編さん委員でお世話になっている土佐史談会・宅間一之会長。著書『土佐史つれづれ HISTORY OF TOSA』(飛鳥、308ｐ、2020 年)は、昨年発刊されたところである。今日はその書籍 39～41 頁に掲載されているトピックの一つである「幡多の卑弥呼」の概要・要旨を紹介させていただきたい。

宅間会長は、まず宿毛市でおこなわれた昭和 23 年(1948)と昭和 55 年(1980)の埋蔵文化財調査について触れる。前者は平田中学校造成、後者は西南中核工業団地土地造成に伴う調査である。

↑高岡山古墳(標高 45.8m)



↑高岡山 1 号墳と同 2 号墳(昭和 55 年)

（1）曽我山古墳と高岡山古墳の出土品

前者では、曽我山古墳が発見された。ただその古墳の 3 分の 2 は既に破壊されていた。全長が 60 メートルあり、何とこの遺跡が県内唯一の「前方後円」であることが分かった。恐らくは、大和政権の許可を得てこの古墳がつくられたことであろう。後漢末の中国製「獣首鏡(じゅうしゅきょう)」と日本製「獣形鏡(じゅうけいきょう)」の 2 枚(1)、それと太刀と鉄矛などが出土している。

後者では、曽我山古墳の 500 メートル東に位置する高岡山古墳が発見された。隆起した人工の地形が 2 か所発見された。高岡山 1 号墳と同 2 号墳である。2 基とも直径 18 メートルとほぼ同じ規模の円墳である。1 号墳からは、筒形銅器・青銅製小棒・鉄刀・勾玉・管玉が、2 号墳墓からは、中国伝来の鏡や石釧(いしくしろ)(2)、勾玉、管玉、小玉等が出土した。調査の結果、高岡山古墳は、曽我山古墳より古い時期の古墳であ

ることが分かった。

（２）高岡山古墳の出土品から見た１号墳と２号墳の関係性

宅間会長は、1 号墳の主(あるじ)は副葬品から判断して大和朝廷など国家規模の大きな権威をバックに一帯を支配した男性の権力者、2 号墳は薄いブルーの碧玉製石釧(腕輪)があることから女性権力者ではないかと推測している。2 号墳には中国製の内向花文明光鏡(ないこうかもんめいこうきょう)も出土している。

宅間会長は、この鏡は 1 号墳の主から、2 号墳の主に贈られた可能性を示唆している。1・2 号墳の男女の主は、父と娘、夫婦、兄妹の可能性があり、**男女ペアで一帯を治めており、恐らくは、邪馬台国の卑弥呼のような神がかり的な呪術的権威を持って治めていた**のではないかと推測している。

（３）高岡山古墳ペア主から曽我山古墳主への権力移動

曽我山古墳の主は、高岡山古墳 1 号墳と同 2 号墳の男女ペアの主より新しい時代の権力者である。曽我山古墳から出土した「獣首鏡(じゅうしゅきょう)」と「獣形鏡(じゅうけいきょう)」の 2 枚は大和政権からの直接譲渡されたのではなく、高岡山古墳の男女ペアの主に従っていた時代に下げ渡されたものであろうと宅間会長は推測。

考古学者・故岡本健児氏の分析も参考にしながら、初めに高岡山古墳 1 号墳の男性の主が最初に亡くなり、その後、一帯で政変が起ったと仮定した。「幡多の卑弥呼」的存在であった高岡山 2 号墳の女性の主を曽我山古墳の主は攻め滅ぼし、これに取って変わったのではないだろうか。こう宅間会長はストーリーを読んでいる。2 号墳の埋葬品の一つである中国製の内向花文明光鏡と薄いブルーの碧玉製石釧(腕輪)が完全に破砕されて発見されたことはこれを裏付けている。破砕された物を埋葬させることは、前権力への強力な否定を意味する。**曽我山古墳の主は、「幡多の卑弥呼」を否定することにより自己の権力をより強固なものにしたいという強い思いがあった**のだろう。

幡多郡内に前方後円墳があったということを恥ずかしい話、この宅間会長の著書を読むまではまったく知らなかった。もっともっと私たちは、地域に目を向け、学習していかなければならないとあらためて感じたことであった。

引用・参考文献

宅間一之『土佐史つれづれ　HISTORY OF TOSA』飛鳥、2020 年、308ｐ.

曽我山古墳と高岡山古墳の今回の掲載写真は、宅間一之氏の著書から引用掲載した。

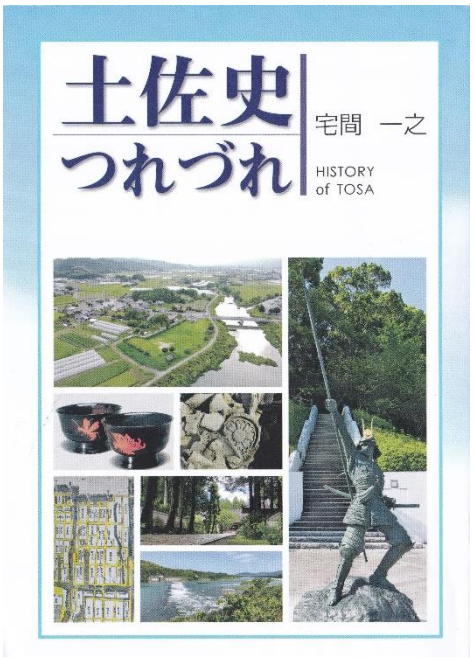
註

⑴想像上の獣の顔を描いた鏡のこと。

⑵古墳時代に石で作製した腕輪のこと。

この高岡山古墳、曽我山古墳の話は、『新市史』においても、第 2 章古代で東近伸副編集委員長が取りまとめて執筆する予定である。そちらの方も楽しみにお待ちいただきたい。

宅間一之『土佐史つれづれ HISTORY OF TOSA』



高知県の旧石器時代から近代に至る土佐史を 88 のトピックに分けて、1 トピック基本 2～3 頁毎に構成されている。このように短く、トピック別に地域史の興味深い話題がちりばめられており、飽きさせず、なによりも内容を理解しやすい。初心者でも地域史が理解できるように工夫されている。

是非、ご購入し、ご一読いただきたい一冊である。

ここで、独断と偏見で、目次から私がおすすめしたいトピックを以下に列挙する。

・「縄文人の人骨は切り刻まれて」本文 24 頁。
・「置き忘れられて神の壺に」本文 33 頁。
・「土佐日記懐にあり散る桜」本文 68 頁。
・「天下に心を懸けた長宗我部元親」本文 95 頁。
・「吸江五台は仏の島よ、並び高知は鬼の島」本文 120 頁。
・「兼山に教えた“はるの”さん」本文 225 頁。
・「藩に金貸す豪農深瀬氏」本文 257 頁。
・「庄屋・吉本虫夫　その生きた時代」本文 265 頁。
・「自由民権運動 in 春野」本文 274 頁。
※これらのトピック以外でも興味深い内容がたくさんあります。

【編集後記】

2001 年に高知県西部を中心にした激甚災害「西南豪雨災害」について過日の高知新聞に特集記事が掲載されていました。あれからもう 20 年が経過したことについて本当に時間が経過するのは早いなあと実感する今日この頃です。あれ以来、線状降水帯に代表されるような局地的な短時間豪雨で全国的に被害が続出しています。これらの一連の気象の変化は、地球が私たちに何かを伝えようとしているメッセージのように思えてなりません。そう思います。

コロナ禍も長期的な様相を呈してきました。疫病・天候不順―。きっと過去にもこのような試練は多くあったはずです。乗り越えられない苦難はない。私たちは歴史を洞察し、学んでいく姿勢を決して忘れてはならないと思います。（田村）